

【講演記録/東方齋・荒尾精先生追悼式】

京都若王子神社に祀られた近衛篤磨公から荒尾精に送られた 「東方齋荒尾精先生の碑」を読む

愛知大学名誉教授（地理学）、愛知大学東亜同文書院大学記念センター元センター長 藤田 佳久

（2019年10月19日、荒尾精の追悼式の若王子神社の追悼式にて）

1.はじめに

皆さん、こんにちは。寒い中ご苦労さまです。無事追悼が終わりました。

今ご紹介いただいたように、先週台風に追われるような感じで高松で東亜大学同文書院大学記念センター主催の講演会を行いました。今年で19回目か20回目になります。ご縁があるところを中心に全国を回ってきました。途中、アメリカにあるアジア学会から招待され、シカゴのホテルとシカゴ大学で講演会をしました。

今年は、今日ここにおられます高松の堀田さんの肝入りで「四国でやってほしい」という話があり、やることになりました。私は文学部地理学の担当でしたけれども、堀田さんは前任の千葉徳爾先生の教え子でいらっやいます。地理学卒業生は仲間の結束力が強く、去年はここが終わったあと高野山に行ったという話を聞いています。今年は小豆島の予定が台風で中止になったということでした。地理学は歩いて何ぼの世界なので、観念論とは違うところがあります。そういう行動力のある方々の集合体で、頼もしく思っております。

今日は、霞山会の堀田さんからご説明がありましたように荒尾精を讃える近衛篤磨公による碑の問題です。私が部屋の中をいろいろ動かしながら整理していたところ碑

文の原稿を見つけまして、「こういうことがあった」という思い出が出てまいりました。それで、今日はこのテーマでやらせてもらおうということになりました。連絡の行き違いがあり、本日のテーマが高松講演会のそれになっております。ご承知下さい。

去年もやりましたが、十数年前にも後援会の方々や霞山会の方々と一緒に碑の前で追悼式典を行いました。そのときに私も参加しました。高さ5mぐらいの大きな碑です。初めて見たときは驚きました。残念ながら、高過ぎて上のほうが読めないし、苔が生えていてなかなかアプローチできませんでした。

2.碑を再生させた三田良信さん父子

もう一度これを再生させようという動きは、金沢にお住まいの書院の42期生（大学3期生）の三田様からです。資料の2枚目の後ろのほうに三田良信さん——われわれはリョウシンさんと呼んでいます——の略歴が書いてあります。次が小さくて申し訳ありません。この方は漢字検定の親分です。京都での講演会のときにここへ来られて、「これでは字が全く読めない」ということになり、次のときに息子さんを連れてこられて掃除をしてくれました。そのとき、はしごを組み、上から慎重に、かつ、それぞれの

文字をバレンで拾っていくという大作業をやっていただきました。

漢字検定の親分の三田さんは、当時金沢大学や北陸大学で中国語・漢字の授業をされていました。「三田さん。申し訳ないけれども、せつかくならちゃんと読めるようにしたいですね」と言ったところ、非常に真面目な方なので、早速きちんとしていただき、それを送っていただきました。

レジュメ 2 枚目の後ろにこの碑文があります。約 1,600 文字あります。一番上は 5m の高さのところですから、下から見上げても読めません。これを下のプレートに読めるように書いて、説明も付け、われわれの大学の名前も入れていただければ、大学や荒尾さんの PR もできるかなと思っております。このように、三田さんは今の状況をつくり出す中興の祖のような方です。非常に熱心にやっていただきました。

レジュメ 2 枚目の下のほうに、そのときの様子を『『東方齋荒尾先生之碑』について』ということで、うちの記念センターの冊子に投稿していただきました。短い文章ですけども、決意を込めて苔をはぎ取り、読めるようにしたということです。大変な作業で、そのときの写真がそこにあります。あまり濃く印刷していないのは、黒くなると写真が読めなくなるからです。

南京には南京同文書院をつくるときに、近衛篤磨公が清国の劉坤一や張之洞と一緒に立ち上げた学校です。そのとき東本願寺の別院ができており、近衛公がそこを校舎にしたいという申し入れをしたら、無理だという話で別のお寺に入りました。建物を貸せない代わりに加賀の国石川県から希望者を求めて送るということになり、こ

こでは 9 人となっていますが多くの書院生を送ってこられたのです。石川県はその後書院に継続的に入学生を送ってきています。

その地元で近衛公と関係のあった方が、荒尾直筆の揮毫の書を持っておられました。これは愛知大学の記念センターに飾ってありますが、荒尾精が東北から九州まで学生を募集してきた事跡です。こういう文章が書いてありました。荒尾さんの字はこういう豪快な字なので、簡単には読めません。それを、三田さんだから読み取っていただいて左側に解釈が書いてあります。壮大な展望を持って学生を集め、「いよいよ、これから行くぞ」ということだと思います。左の解説文の中に、四川の中心地が漢口と書いてありますが、これはちょっと違うかもしれません。

荒尾さんの威信を感じ、三田さんは最もこの碑文にアクセスした人です。愛知大学の記念センターにも、お弟子さんたちを連れて北陸からバスをチャーターして見学に来ていただきました。そして荒尾さんの文字にお弟子さんたちみんなで挑んで帰られたというようなこともありました。残念ながら、三田さんは体を悪くされて去年でしたかお亡くなりになりました。大変惜しい方をなくしたと思っております。

三田さんが書いたページの上のところを読み下し文があります。漢字検定のプロの三田さんが読み下したものです。若干仮名も振っていただいたのですが、われわれはこれがないと漢和辞典も引けません。相当熟語も含まれており、このままでは意味が分からないものがたくさんありました。だいたい読みやすくなりましたが、それでも難しいです。私もそれなりに勉強しまして、1

～2 ページに書いてあるところを大きい文字で書いてみましたので、こちらで内容を見ていただければと思います。

3. 荒尾精と近衛篤磨公

先ほど霞山会の堀田さんが言われていたように、内容に関しては荒尾精が本当に書いたのかどうかという問題もあるわけですが、少なくとも荒尾自身が文章を選んでチェックしたという話は聞いております。読んでいきますと、われわれの研究で荒尾精に関する重点項目が必ずしも記されていないところもありますが、これは歴史的資料の1つの見方だと考えております。では、簡単に内容のご説明をさせていただきます。

これを読む目的は「はじめに」のところに書いています。まず、「近衛篤磨公が荒尾精の顕彰碑を建立した意義」。つまり、どういふことでこれをやられたのかということです。近衛篤磨公と荒尾精の面識はありません。資料的に確認できません。荒尾精は38歳、近衛公は42歳と、2人とも早く亡くなったこともあると思います。

この間、近衛公はヨーロッパへ6年ぐらいいったり、世界旅行に1年掛けて行ったりしています。荒尾精は日清貿易研究所で一生懸命苦勞をし、その前は漢口の楽善堂で若者たちと3年半過ごしていました。なかなか出会うチャンスはなかったと思います。それなのに、同文書院記念センターでは「三聖人」として一緒に並んでいます。2人の間を仲介したのは根津一だと見ていいと思います。

日清貿易研究所を荒尾精がつくっていくわけですが、一方で近衛篤磨公は南京同文書院というのをつくりまします。その最

初の院長候補に佐藤正という将軍があがってきました。この人は日清戦争のときに朝鮮半島で活躍した将軍で、戦時中に片足を失っています。この人を最初の院長に据えようとしたところ、2つの理由で駄目になりました。1つは、佐藤が体調を崩したことです。もう一つは、近衛流に言うと「教育文化事業の交流として南京同文書院をつくる」という趣旨に対してトップが軍人では困るわけです。軍部からも「行き過ぎではないか」という意見が出て駄目になりました。

その代わりとして引っ張り出されたのが京都に隠遁していた根津一でした。近衛公は根津一を東京に呼び出し、南京同文書院の院長を依頼しました。その後の東亜同文書院の院長もその延長としてやったのだと思います。根津一が院長となり、近衛公と絆ができました。根津は、荒尾精の志を受け継いで東亜同文書院を運営していきました。このように、根津さんの情報が2人の間をつないだのだらうと思います。近衛篤磨公は、このような関係の中で荒尾精の功績を知り、それに共感するところがあって、のちにこの碑文を建立したわけです。

次に、「近衛篤磨公は荒尾精をどのように理解し、どのように評価したのか」です。完全に篤磨公が書いた文章ではないにしても、どういう素材を使って荒尾精を称えているのかといふ点で近衛公の考え方が少し分かるのではないかと思います。

ところで、先ほどご紹介した三田良信さんのことです。今回の碑文に関して多大な貢献をされました。碑をきれいにし、文字を明らかにされましたが、われわれは経費を一切払っていません。三田さんが息子さん等と一緒に自費で頑張られましたので、

今度説明文をつくる時にはそのことも添えたほうがいいと思います。

4. 碑文を読む

(1) 荒尾精の青年期

では「碑文」に入ります。ご興味のある方は後ろのページの大きな碑文もご覧になり、三田さんの書き下し文もご覧ください。最初のところは、荒尾の生い立ちに関して書いてあります。昔の人は名前を変えていましたが、「義行」「精」「東方齋」と変わっていきます。最後は東方齋と名乗っておられました。

出身は尾張・枇杷島となっています。これにはいろいろな説があり、名古屋の今の西区という説もあります。ここでは、ご両親の出自の問題も書いてあり枇杷島育ちとなっています。今年名古屋校舎で開催された霞山会とのシンポジウムの際にも、私は荒尾精の出身地の問題にふれたことがありますが、親族が枇杷島にたくさんいるということで幼少期にそこへ出掛けたことは結構多かったようです。

父親は尾張藩士でしたが明治維新で失業します。10歳ぐらいのときに東京に出て父の金物屋を手伝いますが、父は武士の商法で潰れてしまいました。武士の商法だけでも、それを見ていた近くの麴町の警察署長が荒尾少年の力量を評価し、書生として彼を採用しました。そこから、彼の人生が大きく変わっていきます。のちに軍籍を抜いてビジネススクールという方向に進んでいった背景には、枇杷島の市場や自身の東京での商売の経験が大きくあったのではないかと思います。

性格はそのころから落ち着きがあり、志

を持っていたと書いてあります。書生として雇われるぐらいですから、そういう性格だったのだらうと思います。

12歳のときに外国語学校に入り、フランス語を勉強しました。明治の最初のころは、日本が導入したヨーロッパの技術や軍隊はフランス式のものでした。日本の民法をつくり出したのもフランスです。ところが、フランスでは日本の伝統的な入会林野や村の治め方が分からないので、「それは従来どおり」と書いてあります。当時はフランスが主導権を握っていたのでお雇い外国人もフランス人が多く、フランス語を勉強しないとイケなかったのです。今の英語と同じです。

ところが、途中でフランスがプロシアと戦争して負けます。明治政府はドライなもので、ドイツのほうが強いとみてドイツ式に変えたわけです。ドイツ人をお抱え外国人とし、軍隊はフランス方式からドイツ方式に変えました。

地理学で言うと、当初のフランス式の時代、フランスの測量技術者たちを中心に日本の地形図をつくりました。フランス人は面白いですが、ご覧になった方もいらっしやると思いますが、5万分の1の地形図の欄外に地名が示され、少し空欄があります。その白枠のところに、地形図で描かれている素晴らしい景色をそれぞれ描いたのです。この地域がどんなところなのか、景色を見たら分かるわけです。しかも、色刷りでした。

そういうことがあったのですが、プロシア方式に変わった途端に「道路は馬が何頭通れるか」「重さがどれぐらいまで耐えるか」という軍事対策用の地図に変わりました。フランスのロマンあふれる世界が一変しま

した。後に、根津がドイツの将軍メッケルとけんかしますが、時代が古ければフランス式だったのでけんかしなかったかもしれません。

荒尾精も当時の流行であるフランス語を勉強したわけです。それから、古典も勉強しました。幕末から明治の最初のころ、たくさんお弟子さんを集めていた吉野金陵の門下生になり、そこで古典を学びました。剣道も学び、文武両道でした。

生まれは安政6年(1859年)で、明治11年に陸軍教導団に入って陸軍軍曹になります。警察署長の世話で書生になりましたが、当時日本の初等教育や中等教育はまだ整備されていませんでした。軍隊が次々に学校をつくっていくのでそちらのほうで学び、最後は陸軍大学校を卒業します。明治13年には陸軍士官学校を出ています。明治15年には陸軍少尉になります。

このときに、彼はいろいろな国の歴史を勉強しました。その中で、西力が東方アジアへ河川の強い流れのように押し寄せてきている。その状態を初めて認識し、非常に危機感を抱きます。根津一は、後に陸軍大学校で荒尾と一緒に、荒尾流に「だから経済でやっていかないといけない。日本の軍隊では弱過ぎて相手にならない」という荒尾精の考え方に傾倒していくことになります。年齢は根津が1歳上でした。

明治の初めのころは対朝鮮の問題がありました。碑文にはあまり出てきませんが、日本は明治維新で港を開放したのに朝鮮は一向に開放しないということで、朝鮮征伐が必要だという論調がありました。新しい制度で国内世論がまとまらないので外に敵をつくろうという風潮もありました。のちに、

西郷隆盛が中心になって西南戦争で内戦になるということがありました。そういうこともあり、朝鮮を勉強すると背後に清国という存在があり、清国はどういう国なのか、行ってみたいということになりました。

(2) 漢口での荒尾

このところは碑文には簡略的に書いてあり岸田吟香も出てきませんが、岸田吟香を頼ってようやく上海に行きます。そこで岸田吟香から目薬と書籍その他雑貨品をもらって、明治19年、楽善堂を開き、情報収集をしました。そのときに同志を24人集めたこと、簡単に書いてあります。荒尾が指導者になって中国各地、南のほうは閩(びん)・粵(えつ)・滇(てん)・黔(けん)といった南方の諸州から、西のほうは秦・隴・巴蜀(はしよく)・陝西省のところまで、北は蒙古・西は伊犁(いり)。伊犁はロシアとの国境のところでは、

日英同盟のころ、イギリスから「ロシアが清朝の西のほうに入ってきている情報を教えてほしい」と言われたのですが、当時の日本政府の外務省はそんな能力を持っていませんでした。結局、書院の第2期生が頼まれて行くことになりました。その最果ての地が伊犁なのです。そこで的確な情報を得て外務省に伝え、外務省はそれを伝えて面子を保ちました。

しかし、それより前、荒尾精が若者を集めてつくった漢口楽善堂は塾のような学校でしたから、最果ての伊犁まで行ったかどうか分かりません。途中までは行った記録はありますが、その先は分かりません。目的は伊犁なので、当時の国際情勢を考えると清国のロシア国境地帯の伊犁を目指したと

というのは的確な目標でした。

「東方」とは満州三省です。今の遼寧、吉林、黒竜江になります。

荒尾のところに来た若者たちというのは西南戦争で負けた薩摩や熊本の若者、会津戦争で負けた福島や東北の若者でした。彼らは、明治政府のもとでは立身出世の望みが薄くなったということで大陸に行きました。その連中を彼は集めて漢口で組織をつくりました。しかし、当時の清国では正式な外国人でない限り殺されてしまったりしました。このように若者を各地に配置しましたが、帰ってこなかったり、殺されたりということもありました。情報はある程度集まったけれども、全体としては失敗でした。

これは「きちんとした学校をつくらなかったからだ」ということで、帰国後、日清貿易研究所をつくることになるわけです。荒尾精としては、約3年半清国で情報も集めてあちこちらに行き、自分の体験で「禹域九州」を把握していました。古代の禹という王様は灌漑設備を一生懸命つくり治水をやった人で、当時自分の領域として禹域を設定していました。端的に言うと今の中国のメインランドの範囲ですが、それを禹域九州と言っていました。

清国の人でさえ各地を渡り歩いた人はいないということで、荒尾としては自信を持ちました。そして明治22年にいよいよビジネススクールとしての日清貿易研究所をつくらうというわけです。そのとき荒尾は、日本の政財界のリーダーたちに「東亜の安定は、日本と清国が協力する以外にない。協力は不可欠だ」と主張しました。それがうまくできないのは貿易が未熟だからだと。なぜかと言うと、人材がないからです。そこ

で、ビジネスができるような大学堂(日清貿易研究所)をつくって人材養成をする必要があると、政府に話します。

この若さでも荒尾精はやはり有能だったのでしょう。政府のトップクラスが皆賛成したので、すぐに学生募集をスタートさせました。そのころ、東京で勸業博覧会がありました。明治政府が毎年あちこちでやっていたものですが、日本が近代化していく上での情報を的確に出していくチャンスをつくっていました。

(3) 荒尾の日清貿易研究所と『清国通商綜覧』

その中で「日清貿易研究会」を開催して清国の商品を陳列し、欧米より近い隣の国にこれだけ価値のあるものがあることを示しました。一方、東アジアは西側の勢力に次々に侵食されているという危機感も示しています。このようにして、日清貿易研究所開設に向けて志願者300人中150人を選抜し、9月に開校しました。

ところが、当時産業界をまとめていた岩村農商務大臣が病気になり、荒尾への約束の補助金が出なくなってしまうました。これは荒尾精にとって計算外のことです。学生は150人集まっているし、どうしようか。学生も金庫の中が空だと知って大騒ぎをするなど混乱が続きました。そういうときに根津一が抑え役として来ましたが、なかなか収まりません。

荒尾が金策に行った日本から帰ってきて「不満な学生はほかの学校に行け」と、30人ほど退学させたということもあり、計画を全部見直しました。関係のところから3,000円ほどの助成金をもらい、計画も立て

直して創立記念式典を行いました。このときは、清国のそうそうたる各界トップの連中も参加しました。

経営が軌道に乗り、編集中だった『清国通商総覧』を刊行します。これは清国の商品のカタログでもあり、清国の歴史や商工業その他商業関係の文献も網羅しています。それに、荒尾精が3年半清国で商業関係の調査をした成果が入れてあります。今で言うビジネスハンドブックのようなものですが、2,000ページあるのでハンドにはなりませんけれども。こうして、初めて清国の実情を伝えた本を日本で出版しました。

当時、清国は唐^{から}の国と呼ばれており、日本人には漢詩・漢文の世界でしか見たことのないけれども非常に美しい国という印象でした。漢詩・漢文は、当時の貴族階層が美しいものだけを描いていました。ところが、この荒尾の書はそうではなく清国の一般庶民の姿も現して実態に触れているということで、日本でベストセラーになりました。非常に多くの文献を駆使し、数十種類の文献を収録しています。従来の清国の伝統的・基本的な文献も入れてあります。

いよいよ日清貿易研究所がオープンします。最初は体操もしていました。武道的な体操でしたから、清国の人たちは「あれは軍隊じゃないのか」と疑いの目を持つ人もいましたが、そういうものが次第に晴れていきました。

中国にはいろいろの団体が出てきていますが、哥老会という外国人追放の会がありました。そこで起こったのが義和団の乱です。そこで何を主張したかと言うと、清を倒して明の時代に戻せという「反清復明」を唱えました。明後期には「反明復漢」でした。

この騒乱があり、上海や南京も危なくなってきました。

上海では、「西洋人は団結して対抗するのに、日本から来た日清貿易研究所の連中は動く気もない。けしからん」と批判があったのですが、荒尾精は「ここは、優れた日本人の子弟に優れた技量・学業を教えるところです。余計なことはしないが、協力するのはやぶさかではない。非常事態には動きます」という話をして外国人の信頼を得たということが、碑文に書いてあります。実際にそうだったようです。

さらに展開するために、明治26年に学生の卒業と同時に「日清商品陳列所」をつくります。元々これで商社をつくらうとしていたのが前述の資金難でできなくなり、日清貿易研究所という貿易取引の実務を教える付属の学校を表に出さざるを得なかったのです。それが、結果的にはビジネススクールとして効果がありました。さらに「東方協会」を立ち上げ、東アジア全体を貿易でまとめていこうという規模拡大を目指します。

その目的は、東亜の商権の獲得でした。当時、日本人は東アジアでの貿易がほとんどできていませんでした。貿易をする人がいないので、日本を中心にした取引でも清国の商人が牛耳っていました。北海道のコンブもそうでした。その取引を日本人の商人でもできるようにしないといけないわけです。それには、ビジネスのトレーニングをする必要がありました。

(4) 荒尾と日清戦争

もう一つの目的は、日清間の協調です。これをきちんとしたかたちでやれていませんでした。そのためにも東方協会をつくらう

というわけです。伊藤博文などトップにも話をしたら大賛成してくれました。そこで、当時の地方の事業者も含め 1,000 人ぐらい集めてその後押しをして、創立計画を立てました。しかし、直後に野党の猛反対で予算削減となり、帝国議会は解散してしまいました。荒尾という人はついていない人のようです。何か事業をやると、トップの信頼はあるのにあるところで漏れてしまうのです。ここでも実現しませんでした。大変残念なことです。

それから日清戦争が始まります。当時の新聞では「朝鮮の乱」と書いてあります。荒尾は、今、われわれがこの会を開いているこの若王子神社の隣に引っ込んでしまいます。その前に彼は現場にも行っており、戦いの対応策を考えていました。この戦争で清国語が出来るということで多くの門下生を通訳従軍として送らざるをえなくなりましたが、多くの教え子が亡くなりました。彼は責任を感じていたのだと思います。

清国との和議が成立すると、再び清国に行って状況を把握し、日清商工同盟設立を力説しますが、これもうまくいきませんでした。そこで、彼は方向転換して台湾に行きます。台湾は日本の新たな植民地になりました。そこで台湾と日本の間の貿易取引をきちんとしてしようとしました。しかし、いきなり植民地になったわけですから、台湾の人でも簡単に日本人を信用しません。そこで、台湾と日本の間にはかなり溝があることがわかり、彼は心情を測るために神商協会を設立して融和を図りました。

その上で東南アジアの拠点を見たいということで、船で鹿児島から琉球経由で台北に行き、その先に福州、厦門、香港の訪問を

計画します。ところが、台北に入ってしばらくしてペストに罹ってしまいます。3 日ぐらい体の不調が続き、ペストとわかってから 6 日で亡くなってしまいました。亡くなった日が 10 月 30 日です。

以上のようなところから、近衛篤磨公が荒尾精を紹介してある文章を幾つか見てみます。「君は」の「君」は荒尾のことです。もう一度過去に遡りますが、荒尾は安政 6 年 4 月某日生まれです。日にちは分かりません。享年 38 歳です。若いです。

その荒尾は「東亜の時事については、機を見て微を察し、推測したものはだいたいの中する能力を持っていた。隣国との紛争解決には『対清意見』を表した」。これは、先ほど触れなかったところです。清国と戦争するとき、彼は賠償金を取るべきではないとし、領土の割譲もまたするべきではないという『対清意見』をここで書きました。それで平和を進めようとしたのですが、世論は全く違い、「勝ったのだから、賠償金や領土を取るべきだ」というものでした。荒尾のところには多くの反対書面が届きました。

そこで改めて『対清弁妄』という本で、「賠償金を取ると、賠償金は政府が払うのではなくて国民が税金として取られる。国民がさらに貧しくなる。そうすると貿易なんてできなくなる」という理由を書きました。しかし、結果的には台湾の割譲と賠償金を取ることになりました。

君は、「講和条約を妨げるものがあれば、全国商工大会に臨んでその利害を説明し、不十分な点は政府へ建白したい」と思っていました。そして、「韓国の韓廷が乱れたと知れば、対韓政策を定めたりしました」。このころは、まだ韓国は日本領になっていま

せんでした。「しかし、いずれも採用されず、後に試みられることもなかったのです。今、君は既に亡くなっている」と書かれています。非常に残念です。

今、「清韓では突発事件が多発し、その様子を見たり賛否したりしているが、落ち着きを取り戻せないでいる。それだけに、内外の志士たちは君の機を見る早さや、悪いところを思いめぐらすことができるのに、その志が大成しなかったことを惜しんでいる」。君がいたら、もっと解決しただろう、と記しています。

(5) 「大人」としての荒尾評価

次のところです。「このごろ清国は以前の教訓を生かすことなく、臨機応変にいろいろな改革をやるけれども、みんなわが国にすり寄ってきて自分でやらない」。そういう中で、「侮りや患いを防ぐために、清国自体が日本にすり寄ってきている」という状況があると言っています。

最後のページです。「わが朝野を憂う同志たちや君の旧友たちは、君の遺志を継いで危機を救うべく対応している」「だから、天が君をもう少し長生きさせてくれたなら、大局を計画的に治めることができ、国に大きく貢献することは間違いない」と、書いています。

「それを思うと、君のこれまでの心と志を苦しみ、その体を過労させ、しかも目指した方向は思いどおりにならなかった。それらが君の寿命を縮め、その結果、南の沼泥の地で命を落とすことになった」。上海も、昔は沼泥の地でした。書院の学生が行くと 8 割ぐらいが、上海で熱病に罹り倒れていました。

荒尾にはいろいろなことでストレスがあったと思います。それがなければあんな病気には罹らなかつただろうという気持ちがあります。「そして、君の死がこの世の安らぎや危うさ、発展や衰退と深く関わっていたということは気付かれなかった」。本当は気付くべきなのに、実に悲しいことだと残念がって記しています。

最後に「銘」として書いてあります。実際は 4 文字で書いてあります。私は専門家ではないので、これをどう解釈するかという確信はありません。三田さんの解釈も 1 つです。これは、その人をどう位置付けるかという単語の並びの表現だといえます。以下は、私のほうで勝手に解釈したものです。

「歴史ある日本で明治維新を体験し、元気に生まれた賢人。親のような仁を持ち、隣国と仲良くし、兄弟げんかをして外に対しては兄弟で協力する。外からの敵は防ぎ、同族以外の人でも登用し、形而上は道理があり、形而下は器がある。長い知性で安らかで、徳を思い正しい道を与える。普通は民を思い、見識ある人が知識を導く」。ここで「賢人」や「見識ある人」というのは荒尾のことです。そして「多くの人々にこの功德を称えた碑を知ってもらいたい」という言葉で終わっています。

5.おわりに

最後に私のほうの「終わりに」のところですけれども、感想文のような感じでまとめ書きました。

(一)、近衛が荒尾と面談した史料はない。仲立ちは南京同文書院の院長として近衛に指名された根津であったと思われる。碑文の大きさは、近衛の荒尾への高い評価を示

している。

(二)、近衛の荒尾を失った無念さが伝わってくる。近衛は当時、すでにグローバルな世界を体験しており、その中での荒尾の行動や思考を最も理解でき、日本をグローバル化できる有能な人材とみなした。これは、当時としては新しいことだったと思います。パイオニア的な人物でした。それが両者の思いをつなげたものと思われまふ。近衛から見ても明治の世界への視点を切り開いたパイオニアとしての尊敬(リスペクト)があったと思います。

(三)、荒尾の足跡を刻みながら、その情報を丁寧に追っている。特に日清貿易研究所をめぐる荒尾の日清間にかけての試みは、近衛の南京同文書院設立交渉と二重映しになっている。荒尾のやったことが非常によくわかったのではないかと思います。

私がもし碑を書くとしたら、もうちょっと書き加えたいものもあります。しかし、全体としては、近衛の気持ちを込めて書かれたものだと思います。改めて、この2人に面識はなかったけれどもこういうかたちでつながっていたというところが、非常に面白いと思います。それぞれ今日的に再評価し研究することが必要だと思われまふ。

以上、非常に粗雑ですが、この碑文をどう読むかということについては、だいたいこういうことが書いてあるのではないかとということで、私から紹介させていただきました。初めて読んだ人がほとんどだと思います。年を取ってからこんなに懇切丁寧にしっかり読んだことはなかなかなかったので、改めて内容を確認してよくできていると感心した次第です。皆さんに以上からの御感想があればレジュメの下に、メモを書

いていただきたいと思っています。どうも失礼いたしました。

【碑文】

東 方 齋 尾 光 生 之 碑

貴族院議長從二位勳三等公爵近衛篤磨撰
清光祿大夫尚書衛陝甘總督升允製銘并書

荒尾君諱精初名義行號東方齋尾州枇杷島人也考諱義蕭世仕尾州藩著名於時君幼而沉毅有大志年十二入外國語學校又受經芳野金陵之門後則學劍諱武明治十一年入陸軍教導團翌年任陸軍軍曹入大阪鎮臺十三年入陸軍士官學校十五年冬畢業任陸軍少尉先是君在士官學校按中外圖史觀東西國勢以謂西力東漸若河決下流東亞蕩邦之命靡之一髮引千鈞脅亡而齒寒號破而危屢此豈我儕優游之時乎因慨然有救濟志及畢業乞假遊清以不得命未果十九年春乃由上海溯長江深入內地時少壯慕志來會者有二十餘人君與分道四出南極粵漢黔西入秦隴巴蜀北窺蒙古伊犁之疆東涉瀋瀋三省之野崎嶇關備嘗艱苦久之據其自身經歷及獲同人探討者悉得區域九州形勢於是相謀創日清貿易研究所於上海二十二年四月君來歸告諸朝野識者曰東亞之計莫善乎聯日清兩國合其心力以爲富強之遠之規其事權輿於通商兩國通商之未盛者非無物可買遺無人能經紀也誠能於清國要津開一大學堂講習商務以造成人才豈非當今急務耶時相黑田松方諸公皆聽其言而岩村農商務大臣尤以爲有補商政約爲設法給經費君乃遊說府縣招募生徒明年四月適有勸業博覽會之舉商工輻湊都下乃開日清貿易研究會大招商縣紳董隨列後我百貨俾老耆者數人指示需給之多寡販運之利害君亦登場演說日清通商之款款發憤慷慨淋漓移善始罷當此時舉世滔滔心醉秦西文物偶一談及清事輒目之爲迂一朝君偕西力東漸東亞危急之說也所在官民傾聽感倍始注心自於東亞時局他年圖計民生豫爲前定不給不困者實君爲之地也既而府縣子弟應募進京者三百餘君爲考試取優才惠志者百五十人別擢教導才得二十餘人九月到上海舉開教儀經營累月將漸就緒而度支常絀艱窘萬狀岩村大臣又以疾去官不得履給費之約而君志氣加銳續立考完計業心恂恂不保朝夕君乃推赤誠定衆志汰職員節經費尋移校舍舉創立記念之儀於是紀綱重張校運復振又開編纂局修清國通商總覽據同人積年所蒐集參以古今著錄數十種彙衆員分部校定期年而成二十五年夏尋老會匪遙擾江上上海洋人日夜惶惶各結團備不虞獨研究所教學自如不肯附和洋人怒怨之扶領事君乃貽書團帥曰研究所者聚千金子奉授千金學術之學堂也師事心力不致輕與他事抑自知宜盡同舟之義果有警急我師事自當竭力從事中外士商聞之咸知邦人尚義漢加敬畏云二十六年七月研究生畢業即開日清商品陳列所令生員習實務專欲設東方通商協會併合研究陳列二所擴張規模推廣事業其所期一則收回東亞商權二則協辦兩國和好萬一中外有事則居間解紛以省國際爭議之煩也時首相伊藤伯聞之大悅欲以提議帝國議會君乃歷說政黨黨領袖大隈板垣田川三氏並得贊同加以海內紳商千餘人爲之創立員虞履是提議有日而議會解散事竟未行朝野亂起郵船遂破君上疏具陳敵國情勢攻伐善後方略慮故舊門生二百餘人於大本營任偵候通譯等事而自退居於洛之若王子山力圖誘掖後進造就通才和議既定出遊清國視數使憤狀逾月而還摩會朝野有力有聲說日清商工同盟之意又欲遊臺灣視南門鎖鑰經鹿兒島大島琉球至臺北時新舊吏民情意未洽彼此交疑動相乖離君爲設紳尚協會以融和之將遂巡視全島以及福州廈門香港會鼠疫大行先發三日病六日卒實明治二十九年十月三十日也君生於安政六年四月某日享年三十有八君於東亞時專見機察微知無不言德則羣中當隆陳初啓也著對清意見將謀和也著對清辯忘忘書及見議和約條之有所妨也親臨全國商工大會保以利善建白於政府見韓廷再擾也勸當路定對韓要策凡其所謀雖不盡用於當時而其所慮無一不驗於後日君既卒清韓二邦變故西出強鄰漢同陵邀焉端大局安危靡所戾止中外志士益服君見機之平慮慮之遠而深惜其志業之不終近者清國愈窮多難艱難變通取範於我禦侮倚重於我我我朝野同憂之士及與君有舊者方且追君遺志並効力於特危扶顛之策而輔車之勢將以成矣天若假君以年彼得乘此機運經綸大局其所貢獻於邦家者未可限量也奈何苦其心志勞其筋骨空乏其身身排亂其所爲又從而奪之年徒使其卒然死於荒蕪之域瘞瘵之鄉而不知其死之有關於世運之安危興廢也悲夫

銘曰 扶桑舊邦 明治維新 篤生俊乂 親仁善鄰 兄弟鬩牆 外禦其侮 非扶族類 奇拔異取
彰上者道 彰下者器 長治久安 惟德與義 事人從衆 哲士前知 誠告多方 視此豐碑

【レジュメ 1枚目】

『東方齋荒尾先生の碑』を讀む

藤田佳久 (東京石巻分校・地理学)

No. 2

はじめに

(一) 近衛篤磨公が荒尾精の顕彰碑を建立した意義

(二) 近衛篤磨公は荒尾精をどのような理解し、どのように評価したか

(三) 碑の紹介者 三田良信氏のこと

二 碑文

(一) 荒尾の生い立ち

○名前 義行↓精↓東不斎 ○出身 尾張・批旭島、藩士の父

○性格 落ちつきがあり、志を持っていた

○十二歳 外国語学校(フランス語) 経↓吉野金陵門下生 剣↓文武

○安政6(1859)生まれ ↓明治11(1878)陸軍教導団 ↓明治12 陸軍軍曹

明治13 陸軍士官学校 ↓明治15 陸軍少尉

↓内外の国史を学び、西方の東漸に危機感↓対処するか

明治19 ようやく念願の清国↓長江の内陸へ↓同志の若者20余人

↓各地へ(南)鳳凰(滇)黔(西)秦(蜀)巴蜀(北)蒙古(伊犁)

(東)満州三省(遼寧 吉林 黒竜江)

(二) ビジネススマイルへ 自らの体験で得た滿洲九州を把握

○明治22 上海へ日清貿易研究所創設計画

政財界リターへ、東亜は日清の合力

今は通商未熟、交易人不足

商務の一大学堂と人材養成を、

↓政府は貿易促進↓全国留学生募集



日清に懸ける 東亞同文書院の群像

折しも勸業博覧会あり、商工業振興のふりまで、遠い風あり

↓日清貿易研究会を創備、清国商品陳列↓日清通商を力説

↓当時の西洋指向の風潮を「西方東漸の危機感」ともに転換めどす

日清貿易研究所開設へ↓200人中150人選抜↓9月開校、だが赤字

しかも、確約した若村農商務大臣が病氣となり、補助金なしとなる

↓その中で経費節約(不満学生退学も)↓計再見直し(高公廢止)

↓創立記念式典挙行、運営は軌道にのる

↓清国通商総覽を編集局を設け、刊行

収録文庫は数千種、一年で完成

○学堂の意義 明治25年、哥老会「反清復明」騒乱起す

↓上海の西洋人は団結対抗↓日清貿易研は同調しないと批判

↓同研は「よめた子弟にすべからざる学業を招換するが目的だから」と

しかし、協力する心はあり、問題が生じれば独力で解決と↓西洋人の敬意

(三) さらになる展開をめどす

○明治26年7月、卒業と同時に「日清商品陳列所」開設し、実務訓練

↓さらに「東方協会」を立ち上げ規模拡大をめどす、その目的は

①東亜の高権の獲得 ②日清間の協調

↓伊藤博文賛意し、帝國議會へ提案を因り、大隈、板垣、品川

の政党内閣も賛成、事業者1,000人を擁し創立を計画

↓この帝國議會は解散↓実現せず

(四) 朝鮮の乱(日清戦争)と若王子へ退居

↓荒尾は現場へ↓戦いの対応策↓門下生200余人を本学へ通訳後輩

↓荒尾は若王子山へ退居し、この門下生を支援育成した

【レジュメ 2枚目】

。「和義」成立し清国の状況を視察し、日清商工同盟」設立を説
。さらに台湾へまわし、南方の主要都市(拠点)を見るため、台北、

福州、厦門、香港訪問を計画した。

↓最初の台湾で、日本と台湾の新旧役人らの心の相互不信を見抜き、

「紳商協会」を設立し、融和を図った

↓しかし、この台北で、ヘストにかり、明治29年10月30日逝去した。

(六) 近衛篤磨公の荒尾精への評函

。「君は」安政6年4月某日生れ、享年50有8。

東亜の時季については、機を見て微を察し、推測したものは多く、が的中した。

隣国との紛争解決には「対清意見」を著し、和を醸せんとするさ

には「対清弁妄」と2冊を著わした。そして「講和条約を妨げるところか

あれば、全国商工大会に臨んで、その利害を説明し、政府へ建白した。また

韓廷が乱れたと知れば、対韓政策を定めたらしい。しかし、いかれも採用

されず、のちに試みられることもなかった。そして今、君は既に亡くなって

いるが、清韓では突如事件が多発し、その様子を見たり、賛否したり

しているが、迷いつきをとり戻せないのである。↓それだけに、内外の志士

たちは、君の機を見る早さや、悪い所を思いめぐらすこととを思い、その

志が大成しなれたことを惜しんでいる。

。此頃、清国は以前の教訓を生かせず、臨時政府を改革の軌

を我國に求め、悔りや悲しを防ぐためにも我國にすり寄り、

あつたものと思われ。

そこでわが朝野を憂う同志たちや君の旧友たちは、君の遺志を
継いで、危機を救うべく、振興の方向へ向かおうとしている。

だから、もし天が君をもう少し生き長らえさせてくれたなら、大尉を
計画的に治めることが出来、國に大きき貢献することには間違いない。

それを思うと、君のこれまで、心と志を苦しめ、その体を過労させ、

なにも目指した方向は思い通りにならず、それらが君の弄人命を繙め、

その結果が、南の熱病に満ちた地で、命を落すことになってしまった。

そして、この君の死が、この世の安らぎや危うさ、發展や衰退と

深くかかわっていたということは、気付かれなかった。まさに悲しいことだ。

(七) 銘としては

歴史ある日本で、明治維新を体験し、元気に生きた賢人、

親のよきな仁をも隣国と仲良くし、兄弟ケンカしても外に對して兄弟は協力、

外敵の敵は防ぎ、同族外の人をも登用、形而上は道理、形而下は器あり、

長い治政で安らからず、徳を思い正しい道を与える、普通は民を思い、

見識ある人が知識と尊く、多くの人々にこの功德をたたえた碑を知り、

もらいたい。

おわりに

一 近衛は荒尾と面談した史料はない。仲直りは南京同文書院の院長として近衛に指名

された根拠であったと思われる。碑文の大意では近衛の荒尾への高い評価を示している

の行動や思考をもっと理解でき、日本をグローバル化できる有能な人材とみなしたこと

が両者の思いをつなげたものと思われる。明治の世界への視点と切り開いたパイオニアとして

三 荒尾の足跡を刻みながら、その情報と丁寧に通じている。とくに日清貿易研究所を

めぐる荒尾の日清間に架けた試みは、近衛の南京同文書院設立交渉と二重映しに

なつたものと思われ。

四 あらためて、この二への今日的再評価研究が必要だと思われ。